東京藝術大学
大学史史料室の
あゆみ

記録、記憶、想いを受け継ぐ

2021

The GEIDAI Archives: Inherited Records, Memories and Feelings
大学史史料室的发展历程: 记录、记忆与感受的传承

東京藝術大学

目次

刊行によせて
For Publication
发刊寄语

2

塚原 康子（2020~2021年度　音楽総合研究センター長）
大角 欣矢（2017~2019年度　音楽総合研究センター長）

大学史史料室——組織変遷、活動概要
The GEIDAI Archives: Structure Changes, Activities Summary
大学史史料室——组织变迁、活动概要

4

大学史史料室 施設概要
沿革、組織変遷
活動概要（資史料整理作業）
スタッフコラム
橋本 久美子（大学史史料室非常勤講師）
展示記録

所蔵資料の紹介
Introduction of Holding Materials
所藏资料的介绍

18

山田耕筰自伝
東くめ日記、放送原稿
外国人教師関係書類
演奏会関連資料
作曲委嘱関係書類
明治から大正期の授業関連資料

資料寄贈者様の声
Voices of the Documents' Donors
史料捐赠者的寄语

26

増山 歌子 様（2009~2020年　木下保氏資料寄贈）
柏木 成豪 様（2018年　柏木俊夫氏資料寄贈）

近年のプロジェクト
Overview of Recent Projects
近年来的项目概要

30

「戦没学生のメッセージ」プロジェクト
「声聴館」の開設
大石 泰（「戦没学生のメッセージ」プロジェクトリーダー）
嘉村 哲郎 インタビュー
(大学史史料室、声聴館ホームページ運営)
2021年のイベント紹介

刊行によせて

For Publication
发刊寄语

2020～2021年度 音楽総合研究センター長 塚原 康子（楽理科教授）

2020-2021, Yasuko Tsukahara (Department of Musicology, Professor), Director at The Center for Music Research (at Tokyo University of the Arts) / 2020-2021年度 音乐综合研究中心主任 塚原康子（乐理科教授）

東京藝術大学大学院博士後期課程修了（学術博士）。専門は近代を中心とする日本音楽史。主著に『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』(1993)『明治国家と雅楽』(2009)、共著に『ブラスバンドの社会史』(2001)『日本の伝統芸能講座―音楽』(2008)、近年の論文に「日露戦争時の海軍軍楽隊」(2015)「熊本県山鹿市八千代座の演目種目から見えてくるもの」(2019)等。現在、東京藝術大学楽理科教授。

大学史史料室に寄せて

2009年に音楽学部に大学史史料室が開室されて、今年で13年目になります。それ以来、大学史史料室では、『東京芸術大学百年史』編集資料の保存活用とともに、東京音楽学校や音楽学部に関わる新たな史料収集や寄贈史料受入れのほか、2017年から演奏藝術センターと共同で始まった「戦没学生プロジェクト」や、Webアーカイブズ「声聴館」開設などの試みにも積極的に取り組んできました。

このような経緯を経て、大学史史料室には、明治期以来の東京音楽学校の文書や遺品などに加えて、音楽の専門教育機関に特有の楽譜資料や音源資料、演奏会プログラムなど、多彩な種類の史料が所蔵されています。中には卒業生のご遺族から寄贈されたきわめて貴重な品々も少なくありません。また学内に目を向けると、大学史史料室以外にも、附属図書館には明治12年(1879)に設置され東京音楽学校の前身となった音楽取調掛時代の文書類や当時購入された楽譜・書籍が所蔵されており、大学美術館には音楽取調掛―東京音楽学校時代に音楽資料として購入された貴重な楽器・音具類も保存されています。これらは、本学の大学史を構築する際に不可欠の存在であるばかりでなく、近代日本の音楽の歴史を紐解く上でも重要なものと考えられています。こうした各種の資料群が学内に遺存している背景には、明治20年(1887)の創立以来、本学が関東大震災や東京大空襲などの大災害をくぐり抜け、上野という地を離れることなく今日まで活動を続けてこられたという類い稀な僥倖があります。さらに、日本最初の音楽ホールの遺構でもある明治23年(1890)竣工の旧東京音楽学校奏楽堂も、台東区のご支援を得て近接する上野公園内に保存され、コンサート会場として今も活用されています。本学が往時を偲ぶこれほどの好条件に恵まれている点については、幾重もの奇跡的な偶然が重なった結果であり、ただただ深い感謝の思いがあるのみです。

大学史史料室は、近代日本の音楽に深く関わってきた本学の歴史を未来の活動へとつなぐ中核的な場であり、学内外の多くの方々にとっても、数多くの史料を介してその連続性を体感していただく重要な空間です。今後もそうした役割を忘れることなく、史料の収集・保全・公開・活用に努めます。多くの在校生や教職員はじめ音楽に関わったすべての人々が百数十年にわたって追い求めてきた音楽への夢と情熱が、諸種の史料や建造物とともに共有されることを通して、未来の音楽活動を支える人々の糧になることを願ってやみません。

開室以来、何度かの組織変遷（p.7）を経てきた大学史史料室は、現在、「音楽総合研究センター」の一部門として、大学史（音楽取調掛・東京音楽学校・東京藝術大学音楽学部）にかかわる資料の整理・保存・活用の一翼を担っています。

2017～2019年度 音楽総合研究センター長 大角 欣矢（楽理科教授）

2017-2019, Kin'ya Osumi (Department of Musicology, Professor), Director at the Center for Music Research (at Tokyo University of the Arts) / 2017-2019年度 音乐综合研究中心主任 大角欣矢（乐理科教授）

東京藝術大学音楽学部楽理科・同修士課程・博士課程で音楽学（西洋音楽史）を学ぶ。
鳴門教育大学学校教育学部助教授を経て、2000年より東京藝術大学音楽学部助教授、2007年より同教授。音楽研究センター長、総合藝術アーカイブセンター副センター長、附属図書館長を歴任。
専門は16～17世紀のドイツ語圏宗教音楽。

国立公文書館等への指定の必要性について

東京藝術大学音楽学部とその先行組織である音楽取調掛及び東京音楽学校は、東アジア地域で最も早期に設立された近代的音楽専門教育研究機関の一つであり、音楽史上重要な人物を輩出していることからも、その歩みに関わる資料は第一級の歴史的価値を有している。従って、かつて『東京芸術大学百年史』の編纂実務を担っていた音楽研究センター（当時）の一部門が、周年記念事業という枠を超えて、本学の歴史に関わる資料の体系的かつ継続的な収集・整理・保存・活用のため、「大学史史料室」として再出発し、発展を遂げてきたことは大変喜ばしいことである。

しかし、2009年に公布、2011年に施行された公文書管理法は、本学をこの目的達成のための新たな課題の前に立たせることとなった。国立大学法人としての東京藝術大学が有する法人文書は、同法の規定の下に置かれるからである。幸い、東京音楽学校時代までの多くの文書は同法の施行前に大学史史料室に移されており、同室が歴史資料等保有施設の指定を受けたことによって、研究者や一般市民は情報公開請求等の煩瑣な手続きを経ることなくこれらの資料を利用できる。しかし、新制国立大学としての東京藝術大学発足（1949年）以降の法人文書のほとんどは、現用文書として大学事務局において管理されており、広く一般の利用へと開かれているとは言い難い。さらに、公文書管理法の適用を受ける諸機関は、保有する文書の保存期間を定めなければならず、「無期限」扱いとなっているごく一部の文書を除けば、保存期間満了後は当該文書を廃棄する決まりになっている。実際の運用上は、歴史的に重要と思われる文書については期間満了時に延長の措置が取られているものの、保存スペースには限りがあるため、それらもいつかは廃棄という選択を迫られることになりかねない。本来なら、それらの資料（「歴史公文書等」）を本学の附属図書館なり大学史史料室なりに移管できればよいのだが、公文書管理法の規定によりそれらは国立公文書館等にしか移管できない。

一つの方策として、東京藝術大学が有する歴史公文書を、東京都千代田区にある国立公文書館に移管することはできる。しかし、本学の足跡を物語る資料は、やはり本学が自ら責任を持って管理するのが本来の姿であろう。それを可能とするためには、大学史史料室が「国立公文書館等」の指定を受ける必要がある。そのようにしてこそ、保存すべき文書を歴史的な観点から一元的に評価・選別し、その利用を広く研究者や一般市民へと開いて研究調査に役立てることができる。「国立公文書館等」の指定を受けるための条件は、適切な文書管理を行うための設備や体制が整っていることだが、「国民共有の知的資源」（公文書管理法第1条）である歴史資料を適切に保存・管理し、一般の利用に供することで本学の諸活動に関する事柄を「現在及び将来の国民に説明する責務」（同）を全うすることは、本学に与えられた重要な使命である。このような働きを通してこそ、近現代の音楽文化において本学音楽学部及びその先行組織が果たしてきた役割も、多方面から十分に、かつ客観的に明らかにされ得るであろう。

大学史史料室
施設概要

The GEIDAI Archives: Establishment Outline
大学史史料室设施概要

大学史史料室があるのは、
東京都台東区上野公園12-8
東京藝術大学音楽学部2号館1階。

この地はもともと東叡山寛永寺の敷地。
今は桜並木、不忍池、美術館等で有名な
上野恩賜公園の一角です。

The GEIDAI Archives is located on the 1st floor of Tokyo University of the Arts, Faculty of Music, Building 2, 12-8 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo. This place was originally the site of Toeizan Kan'ei-ji Temple. Tokyo University of the Arts is located at the corner of Ueno Onshi Park, which is now famous for its rows of cherry blossom trees, Shinobazu Pond, museums, etc.

大学史史料室位于东京都台东区上野公园12-8号，东京艺术大学音乐学部2号馆1层。东京艺术大学的所在地，曾经是东睿山宽永寺的用地，现在是以樱花树、不忍池、美术馆等而闻名的上野恩赐公园的一角。

ミッション・ステートメント
Mission Statement
活动宗旨与目标

大学史史料室は、音楽取調掛、東京音楽学校、東京藝術大学音楽学部で作成された公文書等の大学史史料と、ご関係の皆様からの寄贈資料を保管し公開してご利用いただくための施設です。
“人にも資料にもやさしいアーカイブズ”をモットーに、大学史史料および日本近現代音楽史資料を中心に収集、保管、公開することにより、文化の発信拠点として国内外に貢献することをめざします。

The GEIDAI Archives was established to store, and make available to the public, the university's historical materials such as official documents created by the Music Investigation Committee, Tokyo Academy of Music, and the Faculty of Music, Tokyo University of the Arts, as well as materials donated by related parties. With the motto "An archive that is kind to both people and materials," we aim to be a cultural transmission point by contributing to Japan and overseas through collecting, storing, and making open to the public the university's historical materials as well as Japanese modern era musical historical materials.

大学史史料室保存并保管来自音乐取调掛、东京音乐学校、东京艺术大学音乐学部各时期的历史文献，以及来自相关人士的捐赠资料。本室将资料进行整理、保管，并对外开放阅览。
以“对使用者、对资料更为适当的档案管理”为宗旨，以大学史史料、日本近现代音乐史资料为中心，积极开展资料的收集、整理与展示活动。作为文化传播的据点，致力于为国内外的音乐活动做出贡献。

利用案内（2021年度）
User Guide (2021)
使用指南

開室日
水曜 10:30～16:30
・祝日、年末年始、大学の休業日、入試等による
　入構禁止期間、整理期間等を除く
・上記を含め予約時に応相談

Open to Public: Wednesday 10: 30-16: 30
(Excluding holidays, year-end and New Year holidays, university holidays, admission prohibited periods due to entrance exams, and etc.)
(Including the above days, use of our facilities is negotiable at the time of reservation)

开室时间：星期三10:30~16:30
·节假日、年末年初、大学假期、因入学考试而禁止入校期间等除外。
·包括上述时间在内，预约时可根据具体情况商榷。

閲覧スペース　座席6席
Free Reading Space: 6 seats
阅览场所　座位共 6席

◇所蔵資料の閲覧
◇口頭・文書・電話でのレファレンス
(May browse materials in the collection)
(References can be accessed through in person interactions, written documentations as well as over the telephone)
◇所藏资料的阅览
◇可以通过口头询问、书面邮件、电话访问等方式进行资料咨询

資料は予約により閲覧が可能です。
種類や性質上ご覧いただけない場合もありますのでご了承ください。
利用の1週間前までにお電話、またはホームページのお問合せフォームよりご予約をお願い致します。

Materials can be viewed by making a reservation.
Please note that you may not be able to see certain requested materials due to the particular types or circumstances.
Please make a reservation by phone or by using the inquiry form found on our website at least one week before you wish to use our facility.

阅览资料需要提前预约。
个别资料因种类或资料性质的关系，可能存在无法阅览的情况，敬请谅解。
请在所希望阅览日的一周之前，通过电话、或是官方主页的预约窗口进行预约。

沿革、組織変遷

Development and Organizational Changes
沿革与组织变迁

大学史史料室では、音楽取調掛や東京音楽学校に関する公文書類、演奏会プログラム、写真などを保管しています。

The GEIDAI Archives stores official documents, concert programs, photographs, and more related to the Music Investigation Committee and the Tokyo Academy of Music.
大学史史料室保管着音乐取调掛、东京音乐学校时期的公文书资料、演奏会节目单及照片等。

一八七九（明治十二）年　音楽取調掛 設置

一八八七（同二十）年　音楽取調掛改組、東京音楽学校設立

一九四九（昭和二十四）年　東京美術学校と合併、東京芸術大学音楽学部に

二〇〇四（平成十六）年　国立大学法人 東京藝術大学音楽学部

創建当初の東京音楽学校（現在の台東区立旧東京音楽学校奏楽堂）

「音楽学部学史編纂室」開室

2009
（平成21）

"Faculty of Music Academic History Compilation Room" opened
“音乐学部学史编纂室”成立

✚ 本学百年史の編纂から活動を開始しました。

百年史刊行年表
- 1987（昭和62）年、東京音楽学校篇 第1巻
- 2003（平成15）年、東京音楽学校篇 第2巻
- 1990（平成2）年、演奏会篇 第1巻
- 1993（平成5）年演奏会篇 第2巻
- 1993（平成5）年、演奏会篇 第3巻
- 2003（平成15）年、大学篇
- 2004（平成16）年、音楽学部篇

「総合芸術アーカイブセンター大学史史料室」となる

2011
（平成23）
5月

Renamed as the "Comprehensive Arts Archive Center University Historical Materials Room"
改称为“综合艺术档案中心大学史史料室”

May 2011

✚ アーカイブ とは?
文書、史料、文書館、史料館のこと。
英語では複数形の "archives" になります。

「音楽学部音楽研究センター大学史史料室」となる

2016
（平成28）
4月

Renamed as "The Center for Music Research at Tokyo University of the Arts University Historical Materials Room"

改称为“音乐学部音乐研究中心大学史史料室”

April 2016

「内閣府告示第533号により「歴史資料等保有施設」の指定を受ける

2017
（平成29）
4月

It became designated as a "Historical Materials Maintenance Institution" by the Cabinet Office Notification No. 533
获得内阁府告示第533号“历史资料等保有设施”指定

April 2017

✚ 歴史資料等保有施設とは?
公文書管理法施行令第5条記載の「歴史的若しくは文化的な資料又は学術研究用の資料」を保有する施設です。

活動概要

Development and Organizational Changes
沿革与组织变迁

大学史史料室が受け入れた資料は、スタッフによる「整理」・「保存」の作業を経たうえで、学内外の幅広い調査研究に「活用」されていきます。

具体的な手順は、形態や保存状態によっても異なりますが、日々、スタッフは次のような工程でひとつひとつの資料に向き合っています。

資料の整理
Organization of materials 资料的整理

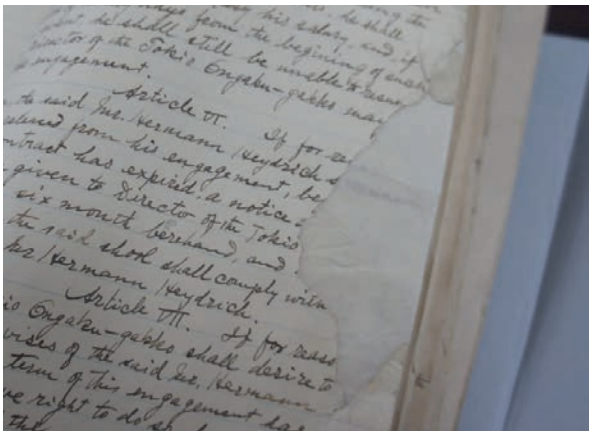
① 所蔵資料・寄贈資料の受け入れ
Process of acceptance of holding materials and donated materials
所藏资料・捐赠资料的接收与保管

② 資料リストにデータ入力
Data entry for the material list
资料列表的数据录入

資料リスト 記入例
（演奏会プログラムの場合）
1) 整理番号
2) 資料名
3) 数量
4) 分類
5) 保存状態
6) 演奏会年月日
7) 資料所蔵場所
8) 備考

③ 資料を保護（中性紙封筒や保存箱に入れる）
Protection of materials (put in acid-free paper envelopes or storage boxes)
资料保护（收纳于无酸纸信封、保存箱等）

④ 配架
Arrangement
库架整理



折れやしわをのばすフラットニングを施した資料

資料の保存
Preservation of materials 资料的保存

資料の修理、デジタル化、保護など、資料の保存は大きな課題です。
これらの課題には史料室スタッフもおこなっていますが、ときには専門業者さんのお力もお借りしています。
Preservation of materials is a major challenge that includes repairing, digitizing, and protecting materials. While the staff of the archive room is involved in these tasks, sometimes the archive relies on the help of specialists.
在资料保存上目前最大的课题是，资料的修复、电子化以及资料保护工作。这些工作既由史料室的工作人员来进行、同时也借助外部专家的力量。

2019年には資料の燻蒸消毒、ドライクリーニングも依頼しました。
In 2019, we have hired to fumigate and dry clean the materials.
2019年，委托IKARI消毒专业公司对资料进行熏蒸消毒、干燥处理。

大学史史料室書庫に搬入されたクリーニング機材

スタッフコラム

Staff Column
工作人员专栏

温湿度管理

紙資料の保存環境としては、温度20～22度、湿度50～55%が最適とされています。
大学史史料室では音湿度計をチェックし、エアコンや除湿器を活用しています。

在宅勤務について

COVID-19の影響で、2020～2021年は在宅勤務もおこないました。

スタッフ間の情報共有	毎回勤務時に日誌データとメールで作業報告。 月に数回、Web会議サービスを利用したスタッフミーティングを実施。
入力データの点検、修正	これまで入力した所蔵・寄贈資料リストのデータを見直し、修正。 普段は時間がとれず保留となっていた未入力データの追加や データシートの統合などを進めました。
イベント準備	展示資料の検討、プログラムの作成（解説文執筆、使用写真の レイアウト、歌詞情報の調査など）

国立公文書館の研修に参加

大学史史料室のスタッフは、教育研究助手も公文書管理研修やアーカイブズ管理研修に参加して文書管理の専門知識の修得に努めています。

スタッフ一覧

氏名	職名	任期
橋本 久美子 Kumiko Hashimoto	非常勤講師 (2011～2015年度 特任助教)	2009年度～
石田 桜子 Sakurako Ishida	特別研究員	2011～2012年度（～2013年3月）
伏木 香織 Kaori Fushiki	特別研究員	2011～2012年度（～2013年3月）
星野 厚子 Atsuko Hoshino	教育研究助手	2013～2015年度（～2016年3月）
澤原 行正 Takamasa Sawahara	教育研究助手	2016～2018年度（～2019年3月）
吉田 学史 Gakushi Yoshida	教育研究助手	2017～2018年度（～2019年3月）
鎌田 紗弓 Sayumi Kamata	教育研究助手	2019～2020年度（～2021年3月）
仲辻 真帆 Maho Nakatsuji	教育研究助手	2019～2021年度（～2021年9月）
齋藤 百萌 Momo Saito	教育研究助手	2021年度～

協力者：コリーン・シュムコー Colleen Christina Schmuckal（英文コンテンツ）、トマス・クレッシThomas Cressy（英文コンテンツ）、嘉村 哲郎 Tetsuro Kamura（ホームページ運営）など。開室から現在まで、大学院生、卒業生にもご協力いただいています。

大学史史料室　橋本　久美子（非常勤講師）
The Geidai Archives (Historical Document Room), Kumiko Hashimoto (Part-time Lecturer)　/ 大学史史料室　橋本久美子（兼职讲师）

東京藝術大学音楽学部楽理科、同大学院修士課程（音楽学）修了。『東京芸術大学百年史』の編纂実務の後、大学アーカイブズ構築と大学史の再検証を行う。音楽学部非常勤講師。近現代日本音楽史、大学史、アーカイブズ学。共著『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』(2011)、乗杉嘉壽校長および戦時下音楽学校に関する論考等。令和2年度国立公文書館認定アーキビスト、日本アーカイブズ学会登録アーキビスト、NPO法人日本アーカイブ協会認定デジタルアーキビスト。

大学史史料室が発信するアーカイブズのビジョン ——“唯一無二のお宝”を“みんなの財産”に——

大学史史料室が平成21(2009)年の開室から13年目に入り、その歩みを冊子にまとめることになりました。教育研究助手の仲辻真帆氏がその企画を音楽学部若手作曲家・演奏家・研究者支援事業に提出し採択され、同僚の齋藤百萌氏と前助手の鎌田紗弓氏の編集協力により刊行と相成りました。当室のアーカイブズとしての業務、利用者対応、企画展示、コンサート企画、コンテンツ公開など、ご自身が直接には関わっていない事柄についても適宜保存されたデータからまとめられています。このような機会を若手に与えていただいた支援事業に感謝するとともに、若き研究者たちの熱意と行動力に敬意を表します。以下、大学史史料室前史の大学百年史編集に初期より関わった関係で、開室の経緯やアーカイブズ[1]のビジョンなどを記して備忘録とさせていただきます。

大学史編纂からアーカイブズ構築への転換

昭和57(1982)年から編集開始し、百周年の昭和62(1987)年に東京音楽学校篇と東京美術学校篇各1巻を刊行した『東京芸術大学百年史』は、最終的に平成16(2004)年に全11巻と別冊1巻の刊行を終えました。美術学部教育史料編纂室では編集史料の保管も可能でしたが、音楽研究センター内のキャビネット数本が史料保管場所であった音楽側は史料を事務に返却し、百年史の典拠史料の散逸も懸念されました。音楽学部ではその頃から校舎の大掛かりな耐震改修が始まり、研究室や事務室も順次、仮移転していました。そうした状況下、用途未定の一室が大学史専用室として初めて確保され[2]、平成21(2009)年、学史編纂室が誕生しました。開室に当たり運用方針を全国の国立大学に探るうち、専用室は年史編纂を目的とせず、アーカイブズ構築へと根本的に転換することに決まりました。アーカイブズとは、個人または組織の活動によって生み出される記録のうち、歴史的に重要な記録を保存する施設を意味し、保存される文書史料そのものも指します。編纂室もアーカイブズも史料を保存する点では共通ですが、編纂室は学内向けの意味合いが強いのに対し、アーカイブズは大学の存在証明となる知のインフラであり、史料を学内外の誰もが使えるようにする点で、あり方が大きく異なります。さらに決定的な相違は、アーカイブズは史料を管理提供する側、学史編纂はこれを利用する側だということです。

“唯一無二”を“みんなのお宝”に

藝大にアーカイブズを作るとは、藝大の記録や史料を、学内外の別なく“みんな”の共有財産とすることです。明治政府がすべての国民に音楽教育を受けさせ、西洋音楽を取り入れ東西二洋の音楽から将来の国楽を創生する拠点として音楽取調掛を置いたことが音楽学部の発祥です。音楽取調掛と東京音楽学校は唱歌編纂や音楽教師の育成を通じてすべての国民とつながり、その歴史は唯一無二の記録文書を生み出してきました。みんなとは、日本国民が基本ですが、アジア圏はもとより世界にも繋がります。藝大の歴史的役割から見ても、その記録が公的なものとして位置付けられるのは当然のことで、国内外の文化振興や関連研究を促すことにもなるでしょう。

1 以下「アーカイブズ」と「アーカイブ」が混在することを予めお断りいたします。
2 専用室の確保においては大角欣矢音楽学部楽理科教授の尽力によるところが大きく、同氏は音楽学部のアーカイブズとともに全学的なアーカイブズ設置を視野に入れ活動された。

アーカイブズは何のため、誰のため

アーカイブズはより良い未来のため、開かれた情報の場を提供するために存在します。人類がより良い未来を志向し、持続可能な社会を実現するには、過去と現在の記録が残されていることが必須です。それは負の記録も含めてです。史料を適切に収集保管し、みんなの共有財産として継承していくことがアーカイブズの役目です。しかしながらその前に、アーカイブズは何よりもまず当該組織・機関のためにあります。自身のルーツや経緯は誰にとっても関心事のはず。それは組織も同様です。言い換えれば、自身の歴史を伝える史料を大切にしない組織・機関に未来は無いのです。藝大のように唯一の音楽・美術の官立専門学校という経歴を持つ大学がその記録文書を保存継承することは、大学のため、全国民のため、ひいては近現代日本の芸術とつながりのあるすべての国と人々に対する務めと言えましょう。

寄贈される史料

開室から間もなく史料寄贈の申し出が相次ぎました。東京音楽学校の卒業生のご親族や関係者からの申し出が主流でした。山田耕筰の自伝の自筆原稿を筆頭に、明治時代の学生の写譜、学徒出陣で戦死した学生の作曲の自筆譜、学校側には保存されていなかった学生生活の一コマを写した写真など、規模も内容も多様です。開室翌年の平成22(2010)年の藝祭期間に、学史編纂室のお披露目と所蔵・寄贈史料の紹介を兼ねて室内で史料公開の展示を行いました。以後、テーマを年々変えながら寄贈史料をお披露目し、寄贈者への報告を兼ねて史料室内で展示することが恒例となりました。藝祭の中止に伴い2年連続で藝祭展示も行っていませんが、リピーターの方もおられ、今年も藝祭展示の日程についてお問い合わせいただきました。当室の特徴の一つに寄贈史料の多さが指摘されますが、卒業生個人の史料も、東京音楽学校時代の公文書と相互補完的に本学の歴史を解明する手がかりとなり、個人の顕彰に限らず、広く研究史料として論文、書籍、各メディア取材などに活用されています。それらを見つけやすくするのもリスト作成の腕の見せどころです。大学史史料室では、文書を作成した事務職員、それを保存してきた学校側、個人史料を託してくださった皆様とスタッフとで、国民の共有財産を生み出し、継承しているのです。

ホームページの開設と国際発信（総合芸術アーカイブセンターを契機として）

平成23(2011)～27(2015)年度、大学直属の総合芸術アーカイブセンターが設置され、同センターのホームページが開設されました。芸術情報センターの嘉村哲郎氏の設計デザインによるもので、以後、大学史史料室の文書のデジタル画像などもそこで公開するようになりました。文書画像のみならず、東京音楽学校が委嘱により作曲した作品の楽譜を復元演奏し音源や楽譜を公開する試みも行いました。総合芸術アーカイブセンターは「本学が有する歴史的・文化的に重要な各種の芸術資料・文書資料（以下「資料」という）を一元的に管理し、次世代レベルのデジタル技術を用いて活用するための総合芸術アーカイブシステムの構築と運用に関する研究を行うこと」（規則第2条）を目的に、芸術情報のアーカイブを要としていました。音楽で言えばそれはデジタルデータである演奏映像を、著作権処理を行ない高音質高画質で配信する、美術で言えば例えば彫刻のような立体を3Dスキャナで高精細にデジタル化し、保存修復や教育用の複製の製作などを研究することでした。大学史史料室は「文書データプロジェクト」という位置付けで、歴史文書のデジタル画像の公開、さらに公文書とともに綴られる楽譜を用いて実際に演奏した音源を、楽譜画像と併せてコンテンツ化し「東京音楽学校が作ったうた」として公開しました。とかくデジタル化を後回しにしがちな文書アーカイブズですが、デジタルデータありきのプロジェクトが土台となり、後述する戦没学生のWebアーカイブズにつながります。

歴史資料等保有施設の指定

大学史史料室を公的・恒久的な存在とするため、平成29(2017)年4月1日、内閣府より「歴史資料等保有施設」の指定を受けました。同日、芸術情報センターの嘉村氏と準備を進めてきた大学史史料室のホームページを開設し、さらに平成31(2019)年にはホームページ上に戦時音楽学生Webアーカイブズ〈声聴館〉を“開館”しました。これは東京音楽学校の戦没学生の作品を紹介する2017年に始まったクラウドファンディングによるプロジェクト「戦没学生のメッセージ」の演奏映像や手稿譜などを公開するウェブサイトです。総合芸術アーカイブセンターのホームページの設計やビジョンが大学史史料室ホームページへ、さらに〈声聴館〉開館へと、新たなニーズに応えながら強化されています。

法人文書の評価選別とアーキビストの役割

アーキビスト育成を謳った総合芸術アーカイブセンターの活動中、文書プロジェクトは総務課が管理する法人文書の評価選別に立ち会い、歴史的に重要と考えられる文書の保存延長を参考意見として提案しました。延長の判断をしたなかには、次の保存期間満了時に同種の文書と合わせて廃棄して良いかどうか判断する予定のものもありましたが、センターの活動が5年間で休止し、法人文書の評価選別や保存に影響を及ぼしている事態は早急に解決せねばなりません。国立公文書館が令和2　(2020)年度に公文書管理の専門職・アーキビストの認証制度を発足させたのも、大学の文書管理やアーカイブズ機関にアーキビストを配置するためです。筆者も令和2年度認証アーキビスト190名の一人となりましたが、これも総合芸術アーカイブセンターの活動指針の延長線上にあります。本学の法人文書を適切に後世に伝えるにはアーキビストが不可欠で、芸術情報のアーキビストとともに本学の活動を記録・継承していく原動力となることでしょう。

国立公文書館等の指定は必須

学史編纂室が開室した平成21(2009)年、公文書等の管理に関する法律、いわゆる「公文書管理法」が公布され、2年後に施行されました。その第1条には「国及び独立行政法人等の諸活動や歴史的事実の記録である公文書等」が「健全な民主主義の根幹を支える国民共有の知的資源」として「主権者である国民が主体的に利用し得るものである」と明記されます。大学史史料室は平成29 (2017)年に歴史資料等保有施設の指定を受けたことで公文書管理法の適用対象外となり、東京音楽学校時代文書など「歴史資料等」を大学史史料室の規則に則って運用できるようになりました。しかし公文書管理法施行後の本学では、事務側で日々生み出される法人文書が1年、5年、10年などあらかじめ設定された保存期間を満了した後、学内で「歴史資料等」のように保存活用することはできません。公文書管理法では、現用を終えた文書は廃棄するか、保存するには国立公文書館に移管することと定められます。学内に保存するには管理運用する学内施設が「国立公文書館等」の指定を受ける必要があります。つまり国立公文書館に準じた施設を学内に設けることで、非現用文書を「特定歴史資料等」として保存利用できるようになるのです。指定を受けずに学内に保存するには、現用期間を延長し続けるしかありません。そうなると文書は50年、100年経っても公開基準を変更する機会を失います。貴重な史料を死蔵せず、作成から30年も経てば学内で国立公文書館等のアーカイブズに移管することが、藝大の歴史文書を「国民共有の知的資源」とし、大学にも国民にも益する道でしょう。そもそもアーカイブズとは、倉庫で置き場・行き場のなくなった古い文書を引き受けるところではなく、現用期間を終えた歴史公文書を適切に評価選別し、そのうち貴重な史料を「特定歴史資料等」として生かし、後世に伝えるところです。現用文書が非現用文書へとスムーズに移行しなければ歴史の空白が生じ、大学にとって損失です。多くの公文書は、現用の間よりもそれを終えてからの方が活用期間も長く、存在価値も高まります。東京藝術大学でも、評価選別で残される文書を学内に保存する国立公文書等の指定は必須です。大学がいかに素晴らしい教育研究事業を行っても、それを体系的・組織的に伝えるアーカイブズがなければ、記録は残りません。廃棄しない限り文書は保存されると考える向きもありましょうが、温湿度変化を繰り返す環境に長く置かれた占領期の酸性紙の文書が劣化し、ひび割れ、判読困難どころか手を触れることすら憚られる例が現にあります。つまり公文書管理法や国立公文書館等の指定があろうがなかろうが、文書の適切な評価選別と保管が行われなければ、結果的に文書の生命は失われます。文書を作成する事務側にとっても、保存延長の現用文書が年々膨らみ、負担が増え続けます。大学は国立公文書館等の指定を受けることで、文書管理の業務を整理し、歴史を後世に伝えることができるのです。

国立公文書館等の指定を受ける条件の一つに専用書庫があります。本学で予め広大な書庫を新設する以外の方法として、今ある大学史史料室の機能を強化し、必要な設備を補充することで道が開けるのではないでしょうか。当室には書架の寄附から誕生した書庫もあります。小規模ですが温湿度管理もできます。また延長を繰り返してきた現用文書の評価選別から生まれる空きスペースを集約し、専用書庫に整備する方法もありましょう。早急に条件を整え、国立公文書館等の指定を受けましょう。

唯一無二のアーカイブズとして

〈声聴館〉のサイトもそうですが、大学史史料室では、史料展示やデジタル画像の公開に加え、最初からアーカイブズ構築を念頭に置いたコンサートを演奏藝術センターとともに企画開催し、その音源や楽譜や文書画像を公開しています。楽譜の画像だけ公開しても、作曲者が構想した音楽を広く共感していただくことは難しいので、これを実際に聞ける状態にし、史料と歴史の生きた継承を行うためです。戦時中に関する調査は全国の大学でも行われ、日記や手紙が収集・公開されています。芸術分野でも、美術については長野県上田市の戦没画学生慰霊美術館「無言館」が美術学校学生の作品を伝えています。本学で音楽学校生の作品と音源を公開することで戦没学生とその時代への理解に新たな視点を提案することができるのではないでしょうか。本学の歴史が全国的に唯一無二、なおかつ全国とつながっていることから考えても、戦時中の東京音楽学校の検証は外すことができません。本学には音楽学部の演奏会を公開する「藝大ミュージックアーカイブ」のサイトがあり、そこでも戦没学生のプロジェクトは公開されています。

御礼

当室は多くの方々のご協力により今日に至りました。組織整備に尽力された方々、地道な現場作業によってアーカイブズの整備に貢献された方々、ご指導いただいた方々のお名前を記し感謝申し上げます。また大切な史料を託してくださった100名を超える寄贈者の皆々様に御礼申し上げます。学史編纂室開室以降の寄贈者名はホームページ上にございます。そして当室の活動に誠実にご対応いただいた大勢の事務の方々に深謝申し上げます。

事業推進・助言:植村幸生様、大角欣矢様、尾高暁子様、嘉村哲郎様、北郷悟様、佐藤道信様、塚原康子様、土田英三郎様、檜山哲彦様、舩山隆様　／　スタッフ、アシスタント:石田桜子様、太田郁様、鎌田紗弓様、齋藤百萌様、澤原行正様、鄭暁麗様、仲辻真帆様、伏木香織様、星野厚子様、湯浅のぞみ様、吉田学史様　／　科研費調査など:大河内文恵様、葛西周様、金持亜実様、鳥谷部輝彦様、中村伸子様、前島美保様　／　共同研究:大西純子様、折田悦郎様、都倉武之様、西山伸様、古田亮様、吉田千鶴子様　／協力:演奏藝術センター、大石泰様、音響研究室　／　英訳:Colleen Schmuckal様、Thomas Cressy様

大学史史料室　橋本久美子

展示記録

Past Exhibition Records
过往的展览记录

藝祭展示

毎年9月、東京藝術大学の大学祭（藝祭）で
展示を行ってきました。

※2012年は美術館展示、2013年はアーカイブセンターの
シンポジウム準備等のため休止、
2020年はCOVID-19感染拡大により中止。

藝祭展示公開の様子（2019年）

藝祭展示風景（左:2014年、右:2015年）

他の参加展示

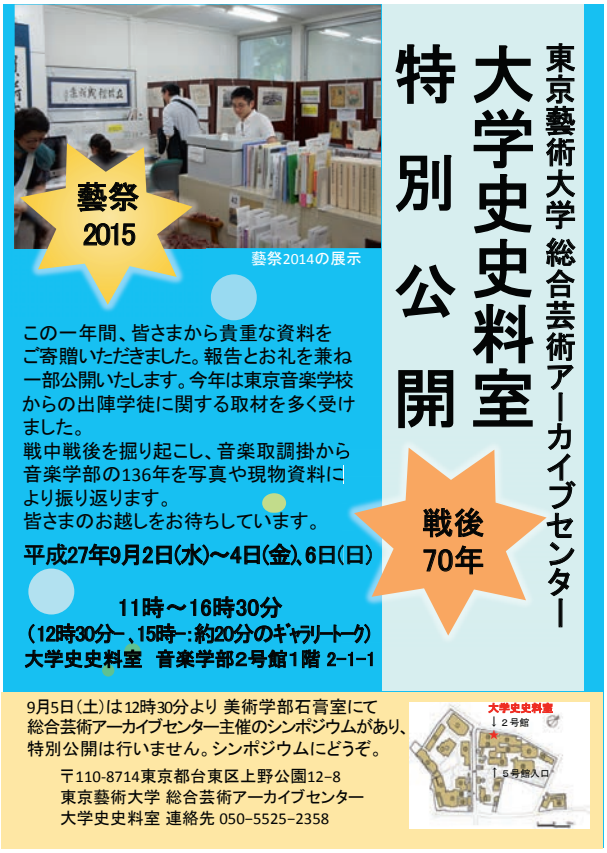
「芸大コレクション展――春の名品選――」

会場: 東京藝術大学 大学美術館, 会期: 2012年4月5日～6月24日

東京音楽学校の教員が作曲した日本各地の校歌の楽譜、依頼書類等を展示。
iPadで音源も聴くことができるように工夫しました。

「ピアニスト小倉末子と東京音楽学校展」

会場: 台東区立旧東京音楽学校奏楽堂, 会期: 2011年10月30日～12月11日
大学史史料室所蔵が所蔵する明治時代の演奏会関連の資料
（プログラム、入場券、写真）等を展示しました。



藝祭展示フライヤー
2010年(左上)、2011年(右上)
2014年(左下)、2015年(右下)

藝祭展示フライヤー
2016年（左上）、2017年（右上）
2018年（左下）、2019年（右下）

大型展示パネル

「写真に見る東京藝術大学音楽学部―その始まりから今日まで」(2017年作成)
2021年現在、大学史史料室前の壁にあります。

「音楽と取調掛と東京音楽学校の外国人教師たち」(2019年作成)
2021年現在、大学史史料室入口左側の壁にあります。
パネルの解説文も史料室スタッフが情報を調査して執筆しました。

所蔵資料の紹介

Introduction of Holding Materials
所藏资料的介绍

大学史史料室の特徴と所蔵資料

The Role and Collections of the Archives
大学史史料室的特征与所藏资料

近年、本学の歴史に関連する調査研究の需要は増加の一途をたどり、卒・修・博論なども学内外を問わず増加傾向にあります。当室は学術研究、演奏会の企画、テレビ番組、ドラマやドキュメンタリー映画制作など種々の目的に対応し、本学の発信拠点の一つとなっています。

大学史史料には、東京音楽学校時代の公文書類、写真、演奏会資料、聞き取り調査の録音等があります。本学教員・卒業生およびご関係の方々からの寄贈資料には、演奏会資料、作曲家の自筆譜、講義ノート、図書楽譜類、写真、音源など。研究資料となる公文書類をはじめ、御寄贈いただいた山田耕筰の自伝原稿、吉本光蔵撮影日露海戦写真等のデジタル画像も順次公開しています。

In recent years, increasing interest in the history of this university has brought about a great demand for research relating to the history of Geidai, as well as the number of related undergraduate, master, and doctoral theses is also on an upward trend at both Geidai and other universities. This room supports scholarly studies while also cooperating with various other activities—including concert planning and the production of television programmes, dramas, and documentary films—and is becoming one of the university's bases for transmitting information.

The main materials archived here are official documents, photographs, concert-related documents, and recordings of interviews with alumni and staff, and concerts etc. of the Tokyo Academy of Music. The donated materials that belonged to staff and alumni, and others connected with the history of the university, include concert documents, handwritten scores of compositions, lecture notes, books and music scores, photographs, recordings, and so on. In addition to public documents that serve as research materials, digital images of items like the original manuscript of Kōsaku Yamada's autobiography, and Yoshimoto Kōzō's photographs of the Russo-Japanese Naval Battle are being made public.

近年来，与本校历史相关的调查研究不断增加，不论是校内的学士、硕士、博士论文的研究需要还是校外的研究需要，均有所增加。本室为了应对学术研究、演奏会企划、电视节目、电视剧、以及纪录片的制作等各种目的的需求，已成为本校对外宣传的据点之一。

本室所收藏的大学史史料，包括东京音乐学校时代的公文书资料、照片、演奏会资料、口述调查的录音资料等。以及由本校教师、毕业生及相关人士所捐赠的资料，包括演奏会资料、作曲家的作品手稿、教学笔记、图书乐谱、照片、音响资料等。以作为研究资料的公文书资料，获得捐赠的山田耕筰的自传手稿、吉本光藏摄影的日俄海战时的照片等，这些资料的电子数据也在陆续公开中。

データから見る所蔵概要（2020年度時点）

本冊子刊行時の公開リストデータを手掛かりにご紹介します。
なお分類方法の見直しを含め、整理作業は日々進められています（p.8）。最新情報は、大学史史料室ホームページよりリストをご確認ください。

+ 文書資料
公に発売されていないもの。音楽学校時代の公文書類と、関係者の私文書の両方を含んでいます。

+ 一般刊行物
公に刊行・発売されたもの。書籍、冊子、新聞、雑誌、広告、目録、出版譜など。

+ 演奏会資料
チラシ、チケット、パンフレット、ポスターなど。コレクションのご寄贈なども頂いています。

+ 手紙類
はがき、書簡など。ご関係の方々からの寄贈資料が大半を占めます。

+ 写真類
写真、ネガフィルム、アルバムなど。

+ 録音・録画資料
CD、DVD、VHS、カセットテープなど。

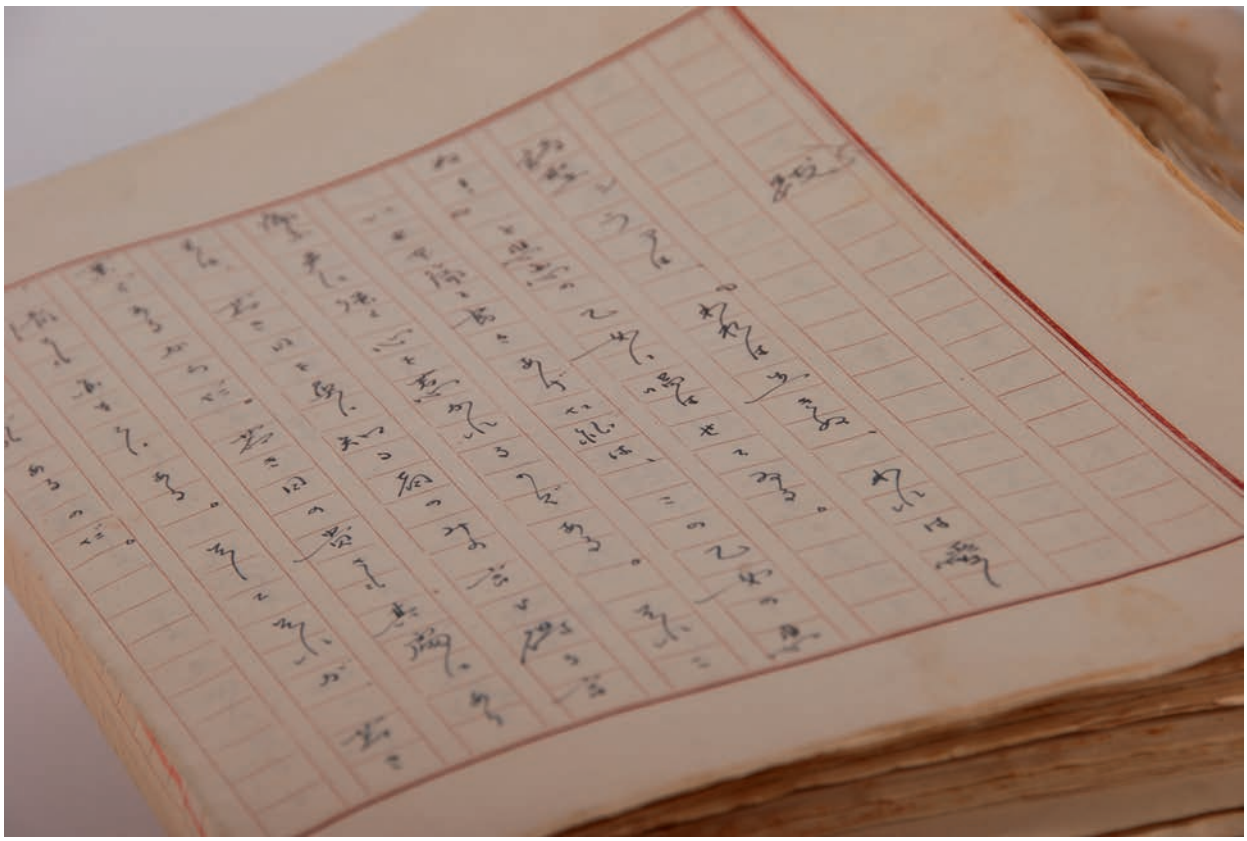
+ モノ資料
徽章・印章、記念品など。

2020/08公開版資料リスト分類	所蔵資料	寄贈資料	合計
文書資料	3842	771	4613
一般刊行物	462	2136	2593
演奏会資料	47	1191	1238
手紙類	6	1343	1349
写真類	843	1318	2161
録音・録画資料	257	260	517
モノ資料	5	48	53

山田耕筰自伝

Autobiography of Kōsaku Yamada

山田耕筰自伝

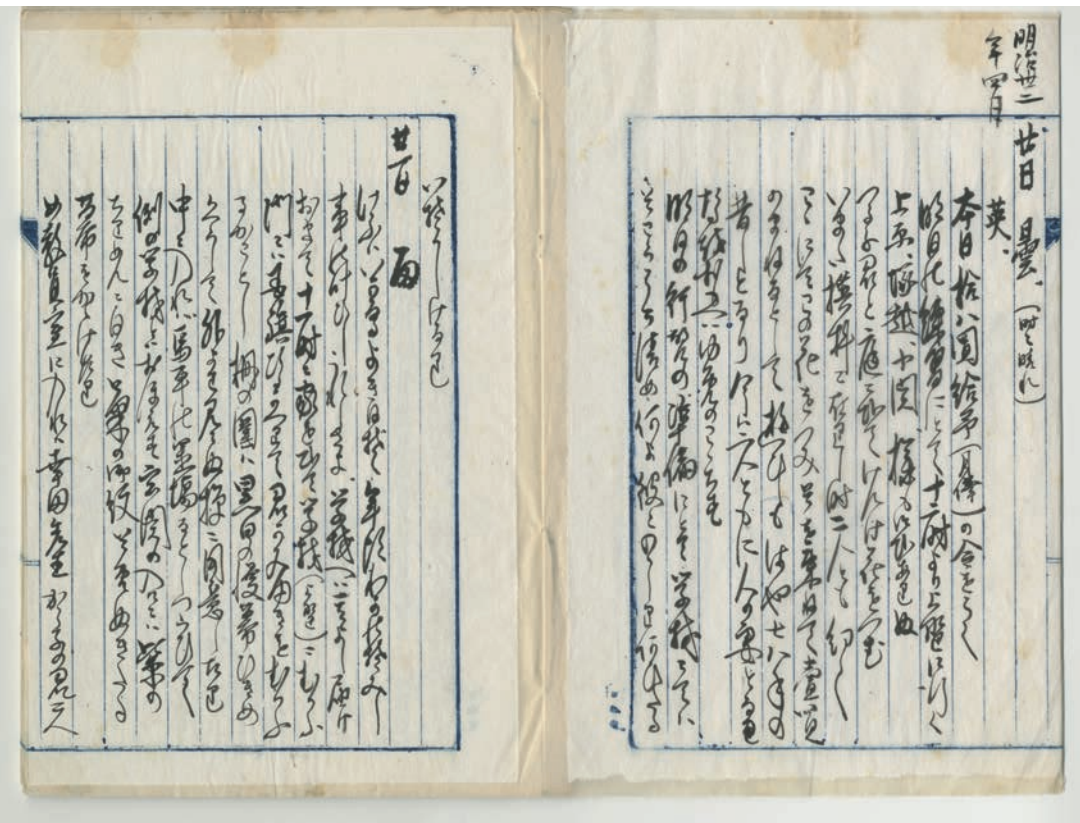


《赤とんぼ》《この道》などの作曲者として知られる山田耕筰（1886- 1965）の自伝『若き日の狂詩曲』（大日本雄辯会講談社、1951年初版）最終原稿。400字詰めの特注原稿用紙509枚。本資料は当時の編集者であった窪田稲雄氏が保管されていたもので、2009年に同氏より寄贈された。

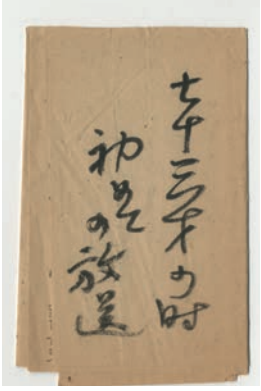
東くめ日記、放送原稿

Kume Higashi's Diary and Broadcast Manuscript

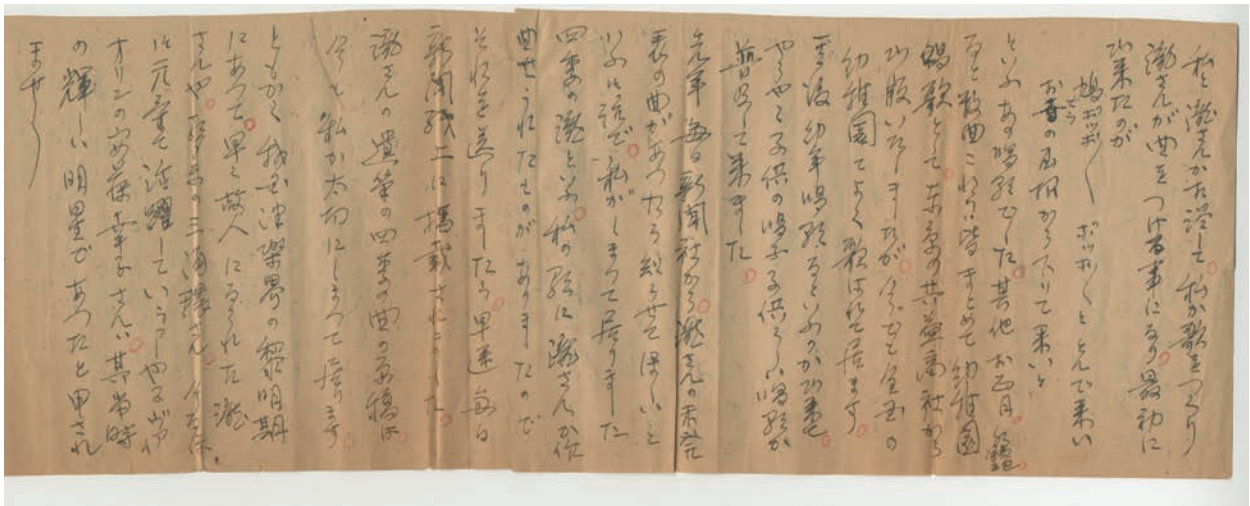
東くめ的日记、广播原稿



東くめ(1877-1969)の日記より(明治32年4月20-21日)。
達筆で所々判読が難しい部分も。



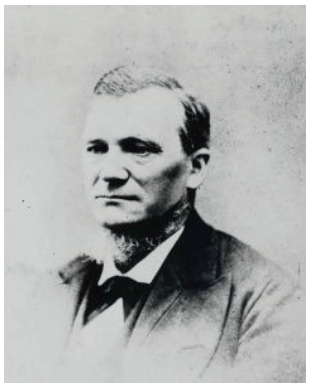
東くめの放送原稿。
《鳩ぽっぽ》、《お正月》などを共につくった瀧廉太郎についても言及している。



外国人教師関係書類

Documents in Relation to Foreign Teachers

外国人教师相关文件

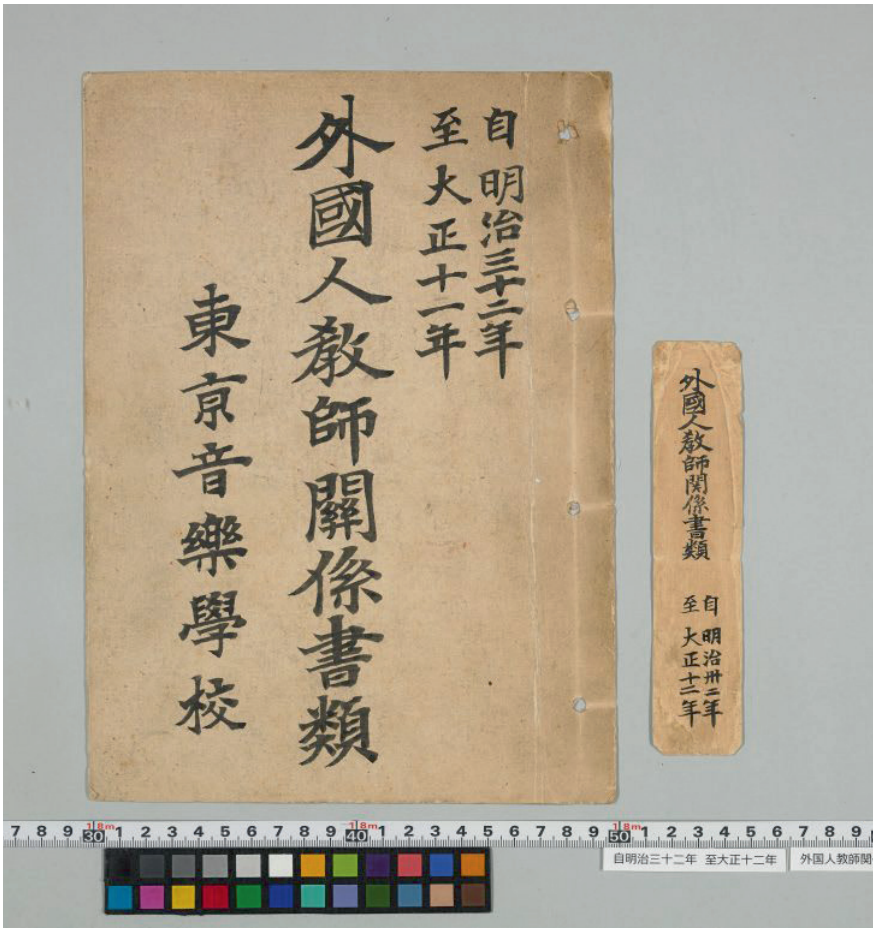


Luther Whiting Mason (1818-1896)

ルーサー・ホワイティング・メーソン

Franz Eckert (1852-1916)

フランツ・エッケルト



東京藝術大学音楽学部の前身である音楽取調掛と東京音楽学校は、L.W. メーソン、F. エッケルトをはじめ43名の外国人教師を雇用。大学史史料室では『外國人教師關係書類』文書綴5冊を保管しており、2019年には外国人教師たちを紹介するパネルも作成した。

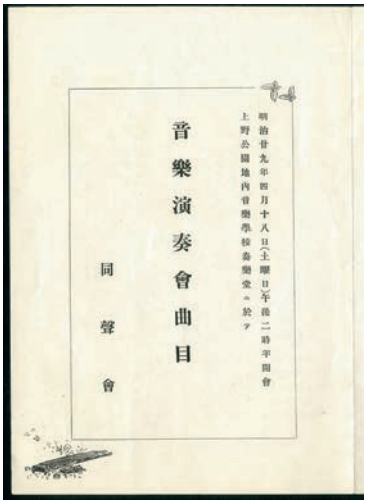
演奏会関連資料

Concert and Performance Related Materials

演奏会相关资料

オルフォイス演奏会　（1903年7月23日、オペラ第3幕の一部）

皇太后陛下行啓午前演奏会　（1930年6月21日、指揮:C. ラウトルップ）



同声会春季演奏会　（1896年4月18日、プログラム）

能舞台開祝賀演能　（1931年5月10日、舞囃子《舟辨慶》）

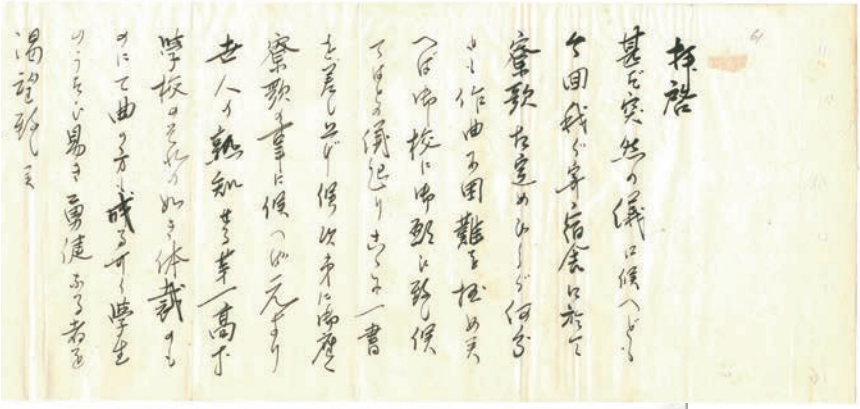
明治～昭和期に開催された演奏会の写真、
プログラムなどを多数所蔵。

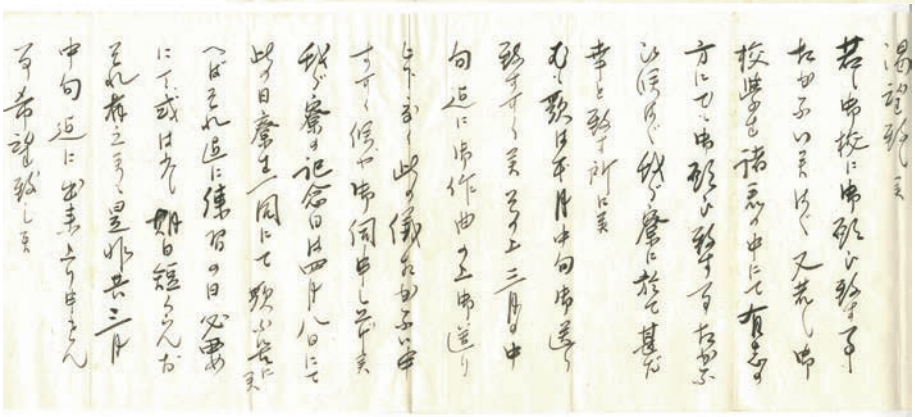
銃後奉仕邦楽演奏会　（1937年11月16日、箏:宮城道雄、ピアノ:黒澤愛子）

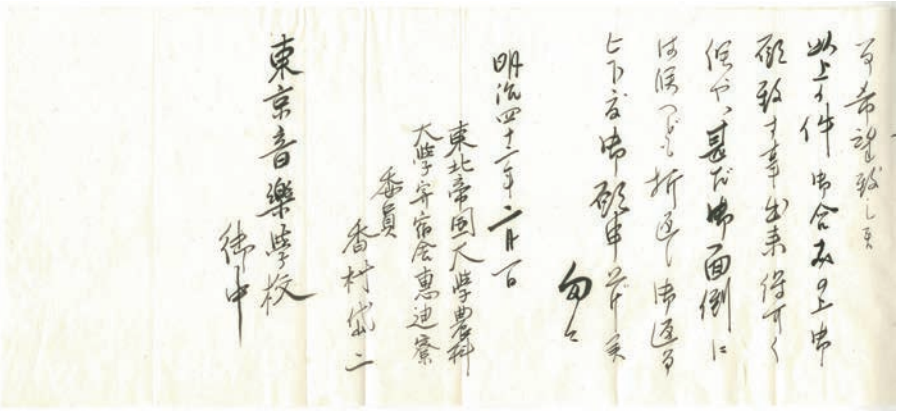
作曲委嘱関係書類

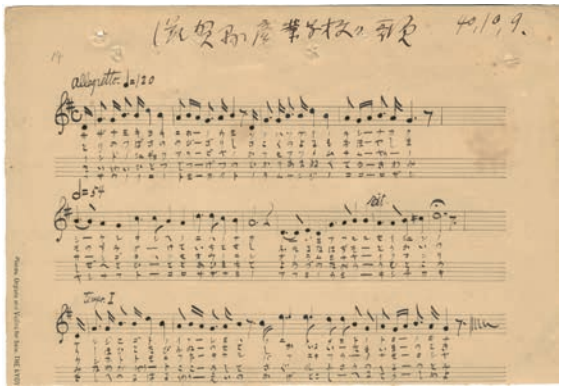
Documents Related to Composition Commissions

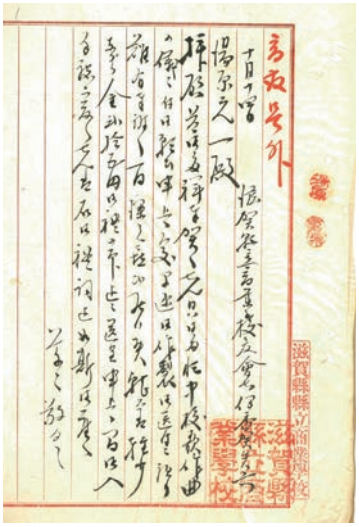
委托作曲相关文件









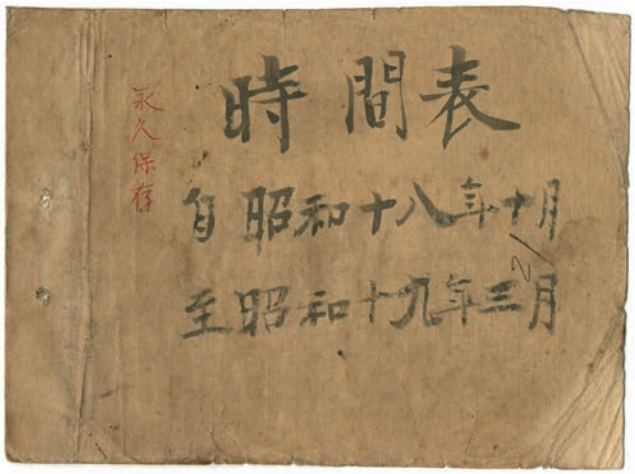


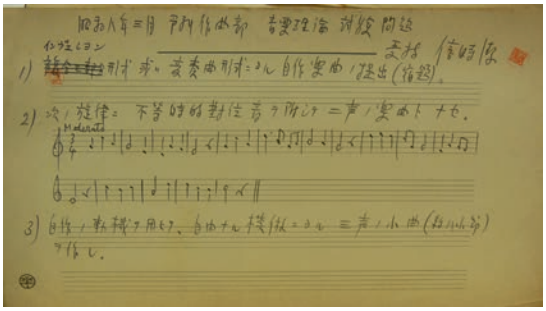
東京音楽学校では1907（明治40）年から委嘱を受けて校歌や社歌など団体歌の作曲をおこなっていた。1957（昭和32）年までの書類がのこされている。

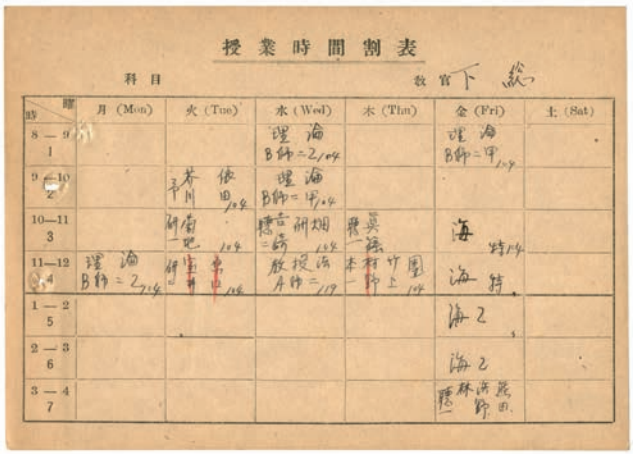
明治から大正期の授業関連資料

Class Materials from the Meiji to Taisho Eras

明治时期至大正时期的课程相关资料







東京音楽学校で実施された入学・卒業時の試験や学期末の試験に関する文書綴が保管されている。他に、各教員のレッスンのタイムテーブルを記載した時間(割)表などもある。

資料寄贈者様の声

Voices of the Documents' Donors
史料捐贈者的寄语

木下記念スタジオと寄贈資料について

増山 歌子 様
（2009～2020年　木下保氏資料寄贈）
Utako Masuyama (donated materials in relation to Tamotsu Kinoshita, 2009-2020)
増山 歌子（2009-2000年 捐贈木下保氏资料）

今から丁度10年前、藝大史料室の橋本久美子先生と大角欣矢先生、声楽の永井和子先生が渋谷区の実家にお見えになり、この古い木造家屋に残された資料をまとめて保管した方が良いなどと色々お話致しました。この家は昭和初期の民芸住宅建築家として知られた山田醇氏の設計により1939年に音楽スタジオ付き純日本風建物として建てられ、声楽家の父木下保（テノール）が1982年に亡くなるまでの43年にわたり往年の音楽家が交流し、声楽を学ぶ多くの方々が研鑽を積んだ歴史があります。1984年には直弟子であった方々が発起人となり、元藝大声楽科教授の藤井典明、三林輝夫、畑中良輔、渡邊高之助諸氏、故岡村喬生氏等が運営委員となって木下記念日本歌曲研究会が始められました。第一回目には團伊玖磨氏の声楽作品がテーマとなり、その時歌われた永井先生も強い印象を残された様です。その後約15年にわたり父と交流のあった作曲家の先生方をお招きし、年2回の公開レッスンとサロンコンサートが行われました。特に平井康三郎、中田喜直、高田三郎諸氏は父とご縁が深かっただけに、何度かご自身の作品をテーマにレッスンをなさいました。どの方も当然のことながら歌曲の詩に対する思いと発音についてなど沢山お話され、改めて日本歌曲の素晴らしさが認識された次第です。当時講師をされた先生方は残念ながら殆ど亡くなられましたが、この研究会の運営委員によって後の奏楽堂日本歌曲コンクールの基盤が出来上がり、今日に至っております。

スタジオの書棚には父が学生時代から集めた楽譜類、SP、作曲家から贈られた楽譜等が戦前から保存され、戦後は東京音楽学校を辞めてからソロの他にオペラや合唱指揮を多くしていたため、楽譜だけでも膨大な量になっていました。父が亡くなってからも暫くは母が音楽室を合唱指導に使っておりましたが、高齢になって老人ホームへ移った後、歴史のあるスタジオの空間を有効に使うために改装し、埃を被った楽譜、書籍など少しずつ整理し始めました。二人の姉と年が離れた戦後生まれの私がたまたま管理人と整理係になってしまい、まずは重要と思われた音源のCD化や自筆譜の確認などしていましたが、私一人ではとても手には負えませんでした。そこに当時楽理科の大学院生だった仲辻真帆さんに8年間ほど資料整理をお手伝い頂き、今回寄贈品のリストを完成して頂いた次第です。

現在大学史史料室は東京音楽学校時代の資料だけでも沢山になり、日本の近代音楽史の宝庫となっております。その限りのある場所に大量の寄贈品を受け入れて頂き、大切に保管して頂けることは有難く、遺族共々心より感謝致しております。とかく西洋にばかり目を向けていた日本のクラシック界ですが、先人たちの苦労と歴史を学ぶ重要性に若い方々が気付いて、少しでも興味を持って頂ければ幸いです。

木下保（1903-1982）について

About Tamotsu Kinoshita (1903-1982)

关于木下保（1903-1982）

1903（明治36）年、兵庫県城崎郡豊岡町（現在の豊岡市）生まれ。東京音楽学校本科卒業後、研究科在学中の1927（昭和2）年に新交響楽団ベートーヴェン没後百周年記念演奏会の交響曲第9番のソリストとしてデビュー。
リート（歌曲）作品の演奏、研究を行った他、團伊玖磨の《夕鶴》等などオペラにも多数出演。
合唱指揮者としても活躍し、慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団をはじめ、数多くの団体の指揮、指導を行った。声楽家、教育者、合唱指揮者として日本における西洋音楽の普及、発展に貢献した音楽家である。
1971（昭和46）年に紫綬褒章、1977（昭和52）年に勲三等瑞宝章受章。

写真提供:増山歌子様

木下保資料の概要

Overview of Materials Relating to Tamotsu Kinoshita

木下保资料的概要

木下保の資料は、2017年まで「木下記念スタジオ」としてサロンコンサート等に提供されてきた木下の自宅で保管されていた。
2011年から2020年にかけて、木下がのこした録音、録画、書籍、写真、ノート類が大学史史料室に寄贈された。
資料リストは大学史史料室ホームページ
https://archives.geidai.ac.jp/4190/ にて公開中。

2021年に整理が完了した約1,600点の木下保資料

まさに僥倖

柏木 成豪 様　（2018年　柏木俊夫氏資料寄贈）

Seigo Kashiwagi (donated materials in relation to Toshio Kashiwagi 2018)

柏木 成豪（2018年 捐贈柏木俊夫氏资料）

この度、父・柏木俊夫の遺した自筆譜、学生時代の日記、写真、書簡、原稿など全てのリストアップと整理の作業をお引き受け下さり、管理・保存頂けることとなりました。ご尽力賜りました史料室の皆様には、心より感謝と御礼を申し上げます。学生時代の日記や写真などが残存するのは、東京大空襲の直前に疎開先へ送られた第一便の中に含まれていて焼失を免れたためです。

大正元年(1912年)9月生まれの父は、1994年12月(82歳)に急逝しました。亡くなる前日まですこぶる元気であったため、部屋は散らかし放題、残された未整理の遺品は内容や来歴が不明なものばかりで、7年間そのまま放置されました。幸か不幸か、2001年秋に区画整理のため一時立ち退きを余儀なくされ、多数の遺品を保存すべきか否か、初めて仕分けをした次第です。

作曲家・柏木俊夫は、軍国化が胎動する昭和7年(1932年)4月、新設された予科作曲部の第一期生として、東京音楽学校に入学しました。兵庫県淡路島の洲本で育ちましたが、父親を3歳で亡くし、母親の希望とは異なる作曲を志し上京した、当時の心境はいかばかりであったのか想像を絶します。幸いにも、良き師、先輩、友人に恵まれて充実した学生生活を過ごしたことが、日記から判ります。

偉大な業績を残された先輩や後輩の諸氏に交じって、父の足跡も共有の史料となりますことは、本人もさぞや僥倖の意と推察します。「歴史は全て現代史である」(クローチェ)との言葉通り、多様な史料室の所蔵史料を活用される皆様には、現代人の視点からではなく、当時の環境に立ち戻って、先達の業績や生き様を想い、自らの糧とされます様に心より願っております。

柏木俊夫（1912-1994）について

About Toshio Kashiwagi (1912-1994)

关于柏木俊夫（1912-1994）

1912（大正1）年、兵庫県洲本市生まれ。
1936（昭和11）年、東京音楽学校本科作曲部を第1期生として卒業した。同校で信時潔、クラウス・プリングスハイムらに師事した。1950（昭和25）年、イタリア・ジェノヴァでの作曲コンクールにてピアノ曲《芭蕉の奥の細道による気紛れなパラフレーズ》で入賞。『和声 理論と実習』（全3巻）共著者の一人で、東京藝術大学講師、東京学芸大学教授などで教育活動も行った。1985（昭和60）年、勲三等瑞宝章授章。

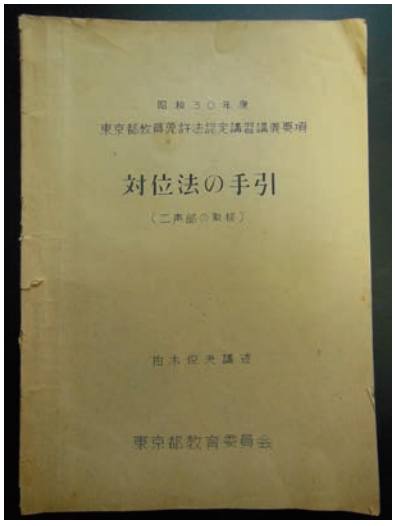
写真提供:柏木成豪様

柏木俊夫資料の概要

An Overview of Toshio Kashiwagi Materials

柏木俊夫资料的概要

柏木俊夫の資料は、2018年に大学史史料室へ寄贈された。
柏木が作曲した作品の自筆譜、草稿譜、写真、書簡、日記などがある。
資料一覧は大学史史料室のホームページ「寄贈資料リスト」に掲載。



近年のプロジェクト

Overview of Recent Projects
近年来的项目概要

「戦没学生のメッセージ」プロジェクト

"Messages from the Students who were Lost in Military Service" Project
"来自阵亡学生的消息"项目

ソプラノ:金持亜実、ピアノ:松岡あさひ

東京音楽学校で学んだ「戦没学生」の作曲作品を実際に音にして、アーカイブ化を進めるプロジェクト。演奏藝術センターと大学史史料室で協力し、演奏会、シンポジウム、資料展示などをおこなってきました。

This project aims to promote archiving through the actual performance of those composed works by students of Tokyo Academy of Music "who were lost in military service". The Performing Arts Center and the GEIDAI Archives have collaborated to hold concerts, symposiums, and exhibitions of these historical materials and compositions.
该项目旨在将战争中阵亡的东京音乐学校学生的作品，进行实际演奏并将其档案化。大学史史料室与演奏艺术中心共同合作，开展了音乐会、研讨会及资料展览等活动。

これまでの主な活動記録

2017
+第1回クラウドファンディングに挑戦。
+7月30日(日)、戦没学生のメッセージⅠ
トークイン・コンサート「戦時下の東京音楽学校・東京美術学校」開催。
+11月23日(木・祝)、「アーカイブ推進コンサート1」開催。

2018
+第2回クラウドファンディングに挑戦。
+7月22日(日)、シンポジウム「今「学徒出陣」をどうとらえるか」開催。
+7月29日(日)、戦没学生のメッセージⅡ　トークイン・コンサート
「戦時下の音楽～教師と生徒」開催。

2019
+戦時音楽学生Webアーカイブズ「声聴館」開館。
+7月27日(土)、アーカイブ推進コンサート2「作曲家・草川宏の
レゾンデートル」開催。

2020
+第3回クラウドファンディングに挑戦。
+12月6日(日)、コンサート・シンポジウム「戦争の時代の芸術
～戦争の記憶を語り継ぐ」開催。

2021
+8月7日(土)、「戦後76年・里帰りコンサートin旧奏楽堂」開催。

イベントフライヤー
2017年7月（左上）、2018年7月（右上）
2019年7月（左下）、2020年12月（右下）

「戦争の時代の芸術～戦争の記憶を語り継ぐ」展示風景

（2020年12月6日、東京藝術大学音楽学部第6ホールホワイエ）

展示ケースには大正時代の入学願書も

パーティションも活用

イーゼルを用いて写真パネルも展示。
COVID-19感染対策で間隔をあけた展示配置に。

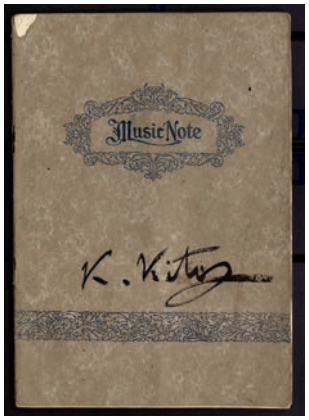
「声聴館」の開設

Starting the “Seichōkan” Project / “声听馆”的建立

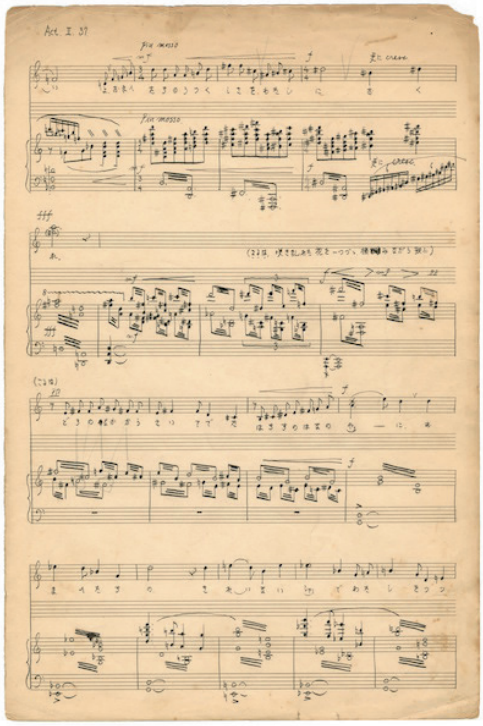
https://archives.geidai.ac.jp/seichokan/

「声聴館」トップページ（2021年8月時点）

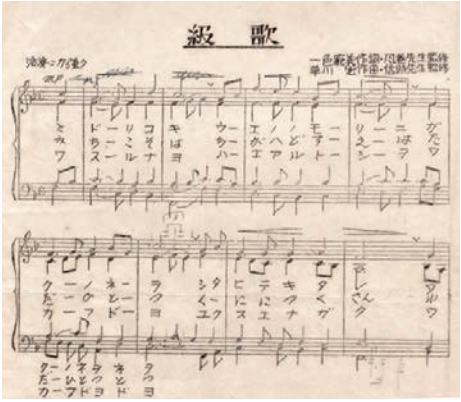
①



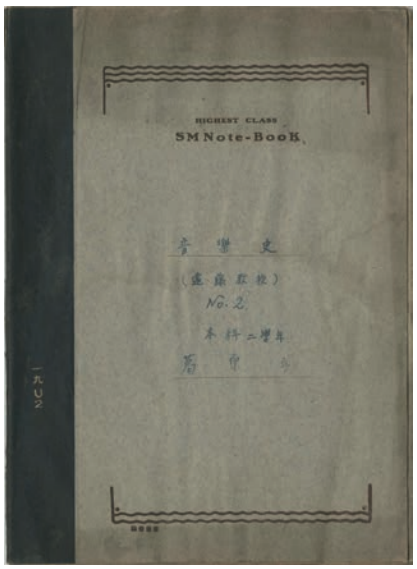
②



③



④



①鬼頭恭一が応召後に所持していたノート

②村野弘二が作曲したオペラ《白狐》の手稿譜

③草川宏が作曲した《級歌》の手稿譜

④葛原守が音楽学校生時代に使用していた音楽史ノート

「戦没学生のメッセージ」プロジェクトリーダー　大石 泰（東京藝術大学名誉教授）

Project Leader for “Messages from the Students who were Lost in Military Service”: Yutaka Oishi (Professor Emeritus, Tokyo University of the Arts)　/ “来自阵亡学生的消息” 项目负责人 大石泰（东京艺术大学名誉教授）

1974年、慶應義塾大学経済学部卒業。同年、日本教育テレビ（現テレビ朝日）入社。
「題名のない音楽会」などの番組制作を担当し、2004年3月、テレビ朝日を退社。
同年、東京藝術大学演奏藝術センター助教授。2016年、同教授。
「コンサート制作論」等の授業の傍ら、奏楽堂を舞台としたコンサートの企画・制作にあたる。
2019年、東京藝術大学演奏藝術センターを定年退職。
現在、東京藝術大学名誉教授。平成音楽大学、札幌大谷大学客員教授。

戦没学生の作品を演奏する意義

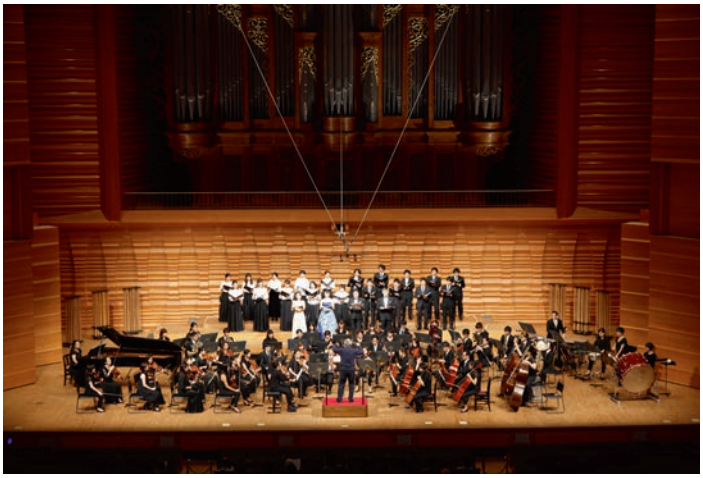
「戦没学生のメッセージ」プロジェクトは、大学史史料室が継続して行ってきた、戦時下の東京音楽学校での教育状況についての調査・研究の成果発表という性格を持っています。ただそれが学会などでの発表ではなく、コンサートやシンポジウムといった形を取っていることが大きな特徴です。一部の研究者に向けたものではなく、より広く人々に訴えることを目指しているとも言えるでしょう。演奏藝術センターは学内において、そうした外部への発信を担っている部局ですから、協力体制を取るのは自然なことです。

コンサートでは、葛原守、鬼頭恭一、草川宏、村野弘二といった4名の戦没学生の作品を紹介してきました。才能も作風も異なる彼らの作品ですが、いずれも東京音楽学校時代、またはその前後に作曲された「習作」である点は共通しています。中には教師から与えられた作曲課題や、音楽的に明らかに未熟・未完の作品もあります。そうしたものまで音にして世に出すことに、疑問を感じる方もいるかもしれません。音楽作品の価値は、純粋にその音楽性で評価されるべきものという考え方があるからです。

ただ「習作」は、作曲家として名をなした人にこそ存在するもので、戦後作曲家デビューできなかった戦没学生にとっては、たとえ「習作」であっても、その譜面のひとつひとつが、彼らがこの世に生きた証しであるに違いありません。だからこそ、戦没学生の声を聴くために彼らの作品を演奏する意義があると考えます。しかし今後、新たに戦没学生の作品が発見される可能性は低く、コンサートを継続していくための材料は限られています。もちろん、同じ曲を何度も繰り返し演奏することも重要ですが、コンサートをプロデュースする側にとっては、マンネリズムに陥らないように何とか工夫したいと思うのが性です。

これまでの3回の「戦没学生のメッセージ」コンサートでも、毎回異なるテーマを設定してきました。1回目こそ戦没学生の作品だけでしたが、第2回「戦時下の音楽～教師と生徒」では、信時潔、橋本國彦、下聰皖一、細川碧といった当時の東京音楽学校の教師たちの曲を、また第3回「里帰りコンサートin旧奏楽堂」では、大中恩、團伊玖磨、中田喜直、畑中良輔といった戦没学生の学友たちの曲をプログラムに加えました。

このようにあえて戦没学生の作品以外の曲を加えるのには、もうひとつ理由があります。それは彼らの曲を他の作曲家の曲と同列に並べることで、意識の上では「戦没学生の作品」という先入観なしに、ひとつの音楽作品として聴いてもらいたいとも考えているからです。



（左）　左から大石泰、野見山暁治氏、大中恩氏、東京藝術大学在学生、卒業生（2017年7月）
（右）　東京藝術大学在学生、卒業生による《昭南島入城祝歌》（草川宏作曲、髙橋宏治補作・編曲）（2018年7月）

大学史史料室および声聴館ホームページ運営 嘉村 哲郎（芸術情報センター助教）

Operation of The GEIDAI Archives and Seichōkan Homepage: Tetsuro Kamura (Assistant Professor, ART MEDIA CENTER)

大学史史料室、声听馆主页运营负责人 嘉村哲郎（艺术情报中心 助教）

研究テーマは、博物館資料を中心とした情報の組織化とデジタルアーカイブ、データ流通・活用。
駿河台大学大学院 文化情報学研究科 文化情報学専攻修了、総合研究大学院大学 後期博士課程
複合科学研究科 情報学専攻修了。国立新美術館インターン、国立情報学研究所 技術補佐員、インフラ系
SE職を経て東京藝術大学芸術情報センター、藝大アーカイブセンターに勤務、現在に至る。
その他の活動には特定非営利活動法人Linked Open Data Initiative理事、慶應義塾大学、学習院大学
非常勤講師など。

Q1 史料室との出会い（プロジェクト・スタート時の逸話など）

2009年頃、橋本先生が在室されていた部屋のLAN関係トラブルの対応がきっかけで、音楽学部の史料室の存在を知りました（芸術情報センターは大学全体のLANやサーバを整備・管理する役割があります）。この頃は着任したばかりでしたが、藝大には組織全体の活動を記録・蓄積していかれるアーカイブ機能が必要だということ感じていたため、このことについて身近な先生方に説明していたところ、美術や音楽学部などいくつかの附属組織と連携した活動展開を視野に入れた、総合芸術アーカイブセンターの構想の立ち上げに関われる機会を頂けました。（この構想の検討に、なぜ自分が関われたのか、今でも不思議に思っています）。

アーカイブセンター構想は、当時の研究担当理事であった彫刻科の北郷悟教授、楽理科の大角欣矢教授らを中心に、東京藝術大学の教育・研究、芸術活動をデジタルで記録し、それらデータを再び教育・研究に活用できる環境をつくることを目標に議論が行われていました。大学の性質上、美術作品や演奏に関する内容が中心でしたが、その中でもアーカイブズは組織の記録文書を扱う重要な役割を担うため、必要不可欠であると説明がなされていたと記憶しています。しかし、藝大では常に新しいものを追究する、作家として活動される先生が多かったためか、過去の記録資料への興味や関心は薄く、史料室の必要性をどう説くか橋本先生や大角先生とずいぶん議論しました。

アーカイブプロジェクトの方向性を見定めることに不安がありつつも、大学史史料室を含む複数の組織の協力により、2011年5月に総合芸術アーカイブセンターが立ち上がり、自身は情報システムと情報発信の観点から関わるようになりました。大学史史料室に積極的に関わるようになった背景には、アーカイブズへの興味の影響があったのだと思います。実は、学部時代にはアーカイブズを中心に学ぶレコード・アーカイブズコースを卒業しています。修士では美術・博物系に転向したといえ、そこでも著名なアーカイブズ系の先生ら（安澤秀一先生、高山正也先生、保坂裕興先生）の元で学べる機会があり、組織における記録史料の重要性には理解がありました。そのため、大学史史料室に関われたことは、アーカイブズに対する興味と記録史料のデジタル化の観点から、古くて新しい（史料とデジタル）ものに関わってみたい気持ちがあったのだと思います。

Q2 当初から（アナログのみならず）アーカイブのデジタル化を目指して、アーカイブセンターが立ち上がったのですか？

はい。アーカイブセンターは、美術・音楽・映像の各学部・研究科の卒業制作作品や研究成果、組織が保有する資料等のデータを集積し社会に情報発信することで、これらのデータが利活用されて、再びそこから新たな研究や作品が生まれる循環型のデジタルアーカイブモデルをめざしていました。そのため、当初からデジタル化と情報発信を意識した組織構成となっています。アーカイブセンターには軸となる研究グループが4つあり、そのうちの一つにアーカイブズを扱う大学史史料室がありました。

当初の大学史史料室の活動は、史料室として学内の資料を残していかなければならないという雰囲気を藝大内に根付かせるための活動を展開していたと記憶しています。具体的には、公文書館相当の機能を持った組織化をめざしていました。その頃、他の国立大学では歴史資料等保有施設など公文書管理法の適用対象になる指定を受けた大学（京都大学や名古屋大学）が出てきていたことも背景にあります。その一方で、自分はさまざまな資料やできごとをデジタル化する方法やデータ活用を考える「情報発信・システム研究」グループの立場で関わっており、とくに史料室の資料のデジタル化やデータ活用に関して強い興味がありました。デジタル化とデータ活用は、大学史史料室だけのことではありませんでしたが、アーカイブセンターは当初よりデジタル化をめざしていた組織でした。

Q3 当初参考にしたノウハウ、事例は？

アーカイブセンターのプロジェクト化が決まったとき、調べた限りでは美術・音楽・アーカイブズのデジタル化と情報発信・活用を一つの組織が扱う例は見られませんでした。しかし、個々の分野に関しては先例があったため、4つの研究グループがどのような情報を扱い、取り組んでいくのかという点についてはイメージがありました。大学史史料室の場合は、京都大学や名古屋大学が先行していたこともあり、参考にさせて頂きました。また、文書管理や公開に関しては、この頃に学習院大学の保坂教授を訪ねる機会があり、その時に「まずはどのような形でもよいので、資料の存在が一覧としてわかることが大事」というお話しを頂いたことがあります。それまでは、資料情報の管理や公開のためにデータベースシステムの導入にこだわっていましたが、エクセルのリスト形式でもいいから、まずは史料室の資料の存在を示せるようにしようと、考えを改めるようになりました。この背景には、2010年代にあったあらゆるデータをウェブ公開して共有する活動「オープン・データ」の影響もありました。「オープン・データ」とは、ウェブを発明したティム・バーナーズ=リー Tim Berners-Lee（1955-）が、2009年のTEDでの講演において発した一言「Raw Data Now」がはじまりです。この講演後、英国や米国、EU諸国が公共データを次々にウェブ公開していきました。そして、行政や公共データの公開から始まった活動は、次第に美術館・博物館など文化的な分野にも広がりました。

――博物系、美術系の公開のスピードについては、嘉村先生自身どのように実感しましたか？2021年現在の感覚では、芸術系のそうした活動は何につけても政治系のそれよりも非常に遅いイメージがありますが……

オープン・データの活動でデータ公開が先行した分野は、公共・行政データですが、これは著作権問題を深く考えなくても良かったため、公開できたという背景があります。美術・博物系の難しさは、著作権問題への対応で、これを実行したのが欧州のデジタルアーカイブプラットフォーム「ヨーロピアーナ」（https://www.europeana.eu/）です。ウェブ公開したデータの著作権表示には、クリエイティブ・コモンズがよく使われますが、ヨーロピアーナは欧州の数千館に及ぶ美術館・博物館等の文化施設が保有する資料やコレクションの属性情報を収集して、それらの属性データの二次利用を可能とするために専用のライセンス「CC0」（https://creativecommons.

org/publicdomain/zero/1.0/)で公開する方針を進めてきました。これは、それまでの文化・芸術系のデータ公開と活用の考え方とは異なり、オープン・データの動きにあわせて議論されてきた結果といえるでしょう。　オープン・データは、どのような形式でも良いので、どこに何があるのかという情報を公開して、誰でも利用できることをめざしていましたから、大学史史料室においても少なくとも保有資料を一覧できるリストをウェブ公開しました。これと同時に、資料のデジタル化とコンテンツ化も進めていましたので、著作権切れの資料画像データに対してはオープン・データにならう形で二次利用可能なパブリックドメインを付けています。現在では、日本においても美術・博物系のデータを積極的に公開して活用できるようにしていく流れがみられますが、これらはここ10年のオープン・データや欧米の影響が大きいですね。

Q4 もっとも困難だったエピソードを教えてください。

――まず、史料の取り扱い面では?

アーカイブズは、絵画や彫刻のように色や形状など視覚的に興味を引く情報を持たない文字資料のため、目立たせることが難しかったですね。文書資料をデジタル化しても、そこに表示されている内容は文字のため、これを視覚的にアピールするにはどうしたら良いだろうかと橋本先生と悩んだものです。そこで、当時やってみたことは、楽譜史料に対して音を付けてカラオケのような歌詞表示の効果を加えた動画の作成や文字資料と関係がある写真類を電子書籍としてiPadで見られるようにするなど見せ方を工夫したことがあります。アーカイブズは、データを公開しても活用方法がなかなか難しいところがあると思いますが、使い方は多様にあると思います。例えば、資料の文字画像の部分を切り出して、様々な文字画像を貼り付けて絵画のような画像作品に仕立てることや、書かれている文字一つ一つをコンピュータ上でアニメーションのように動かして視覚的に魅せる史料にしてみること等、発想次第では現物では考えられないような資料の使い方ができるのではないかと思っています。

――システム面では?

アーカイブセンターのデータを保存していた装置の故障により、すべての活動データを消失しそうになったことがありました。データを保存していた装置は、メイン装置とメイン装置から週一回バックアップする装置がありましたが、突然バックアップ装置が故障して全てのバックアップデータを失ってしまったのです。幸いにもバックアップデータでしたので、最新データの消失は免れたのですが、二つの装置は同時期に導入していたためメイン装置もすぐに壊れるのではないかと……当時は冷や汗をかきました。この装置は、大学史史料室だけでなく音響研究室や美術情報プロジェクトのデータも含まれていましたから。アーカイブセンター4年間の活動データが一瞬で消えることがあったならば、それは悪夢ですね。現在は、新しいデータ保存システムを導入し、これまでと同様に2台の装置で管理しているほか、月一回磁気テープに手動バックアップしています。クラウドサービスや大容量の保存システムが発達した現在ですが、50年前以上も前に作られた磁気テープによる保存方法が一番信頼あるというのは、なんとも難しい心境です。

Q5　史料室のHPのレイアウトや運営において改善していきたいところは?

現在のレイアウトについては、特別な工夫は特にしていません。とりあえず、見やすさに重点をおいて作成したかな?　今後、実施して行きたいことは、現在はエクセル・シートで公開している史料のリストに加え、画像データと共に管理できるデータベースのシステム化です。これにより検索機能が使えるだけでなく、画像と資料情報を同時にウェブ公開できるなどの利点があります。

――外国語翻訳の課題について。現在、コンテンツ全体的には外国語検索ができませんが最近、留学生や外国からの問合せも増えています。

英語コンテンツは、留学生などに翻訳して頂いたものがありますが、どうしても追いつきませんよね……個人的には、機械翻訳でもよいので情報を探せるようにしてもいいのではないか、と思っています。ただし、学術的な内容や難しい表現の語句は、機械翻訳では誤った結果を表示して誤解を招く恐れがあるため、慎重になるべきという意見もあります。そのため、すべての情報を多言語化するのではなく、簡単な資料情報程度を機械翻訳に任せることで、世界中の人々が資料を見つけられるしくみができないだろうか、と考えています。ちなみに、芸術情報センターICT(https://amc.geidai.ac.jp/ict/)では、多言語対応の自動翻訳機能を導入しています。11カ国語に対応し、英語は問題無く理解可能なレベルだと思います。

――確かに5年くらい前は、まだGoogle翻訳などの精度も今ひとつでしたが、最近はきちんと意味が通じるようになったなと、SNSなどを使用していても実感できます。

芸術情報センターICTが利用している自動翻訳機能は、まれに不思議な表現が見られますが、その言語のネイティブにとっては内容や意味を補完できる程度のものだと思っています。情報流通の問題は、自身の研究興味でもありますが、大学史史料室のデジタルコンテンツを世界に向けて発信することで、それら情報をどのようにして必要な人にリーチさせるのか、あるいは必要としなくても何かのきっかけで興味を持ってもらえるような仕掛けづくりができるのか、引き続きの課題です。

Q6 データプラットフォームにおける、全世界的なトレンドについて。

実は先般、国立国会図書館が主催のイベントで、大学史史料室のデータを無償で使えるデータプラットフォーム「ウィキデータ(Wikidata)」に登録・公開する試みを実施しました。ウィキデータは、ウィキペディアと同じウィキメディア財団が開発するツールの一つで、人文科学系の分野ではこれを利用したデータ公開が世界的なトレンドになっています。イベント時は、ウィキデータにあった「山田耕筰」のデータつながりを用いて、国立国会図書館の歴史的音源と藝大ミュージックアーカイブ、大学史史料室それぞれの情報を検索して抽出し、画像や音声データの関係を可視化するなどを試みました。最近は、色々な組織が公開したデータと、自組織が公開したデータをつなげて使うことがトレンドになりつつあります。また、これらのデータのつなぎ役は、ウィキデータに登録すれば誰でもデータを編集できるという点も特徴的です。IT分野では、日々新しい技術や仕組みが作れていますが、今後もどのような方法で情報を公開すると、世界の人々にリーチできるのかということを意識して、取り組んでいきたいと考えています。

Q7　最後に史料と藝大の関わりという面から、過去あるいは未来に寄せて、おひとこと。

過去にあったものを調べ、学び、そこから新たな発見や知識を生かす、「温故知新」という言葉がありますが、史料とはまさにそうあるべきもので、大学史史料室は、藝大の過去を知ることができる重要な情報源です。そして、史料は、それらが勝手に集まって使えるようになるものではなく、歴史を綴るひと、それらを編纂して管理する人たちの苦労があって存在できるもの。

これから数十、百年後の東京藝術大学のためにも、大学の記録とその史料を支える活動はいっそう重要になるものと考えます。

インタビュー日: 2021年8月3日(火)　Zoom上

インタビュアー:齋藤百萌

2021年のイベント案内

This Year's Event Information:
本年度活动预告

2021年8月 August, 2021 ／ クラウドファンディング活用事業

戦没学生のメッセージⅢ　戦後76年　里帰りコンサート in 旧奏楽堂

Messages from the Students who were Lost in Military Service III
76 years after the War Homecoming Concert at the Original Sogakudo Concert Hall
来自阵亡学生的消息 系列3 战后76年 归乡音乐会 in 旧奏乐堂

【コンサート概要】
日時:2021年8月7日(土)15時開演(14時開場)
場所:台東区立旧東京音楽学校奏楽堂
入場料:3,000円　※全席指定

【併催企画展概要】
戦時下の東京音楽学校生たちをテーマとした展示
会期:2021年8月1日(日)～8月12日(木)
場所:台東区立旧東京音楽学校奏楽堂 第1展示室
入館料:一般300円、小・中・高校生100円

旧東京音楽学校奏楽堂　当日の展示風景
（上）1階の第1展示室
（下）2階ホワイエ

2021年10月 October 2021 ／ 東京藝大I LOVE YOUプロジェクト助成事業

音楽に託された未来――東京音楽学校のアーカイブズ史料より

The future entrusted to music: from the archives historical materials of Tokyo Academy of Music
寄托在音乐中的未来――来自东京音乐学校的档案史料

【コンサート・展示概要】
日時:2021年10月2日(土)14時開演(13:15開場)
場所:東京藝術大学 上野校地 音楽学部内 第6ホール
第6ホールホワイエにてコンサートに関連した資料を展示予定

ブックレットワーキンググループ

塚原 康子（総括）

鎌田 紗弓（編集、レイアウト）
齋藤 百萌（編集、インタビュー）
仲辻 真帆（編集、構成）

Colleen Schumuckal（英語訳）

鄭　暁麗（中国語訳）

橋本 久美子（構成）

編集後記

このたび、初めて大学史史料室で編集したブックレットを
発刊するはこびとなりました。

お忙しいなかご寄稿くださった先生がたと資料寄贈者の皆様
および翻訳や編集作業に携わってくださった皆様に心より
御礼申し上げます。

ブックレットの編集・発行にあたり、2021年度 東京藝術大学
「音楽学部若手作曲家・演奏家・研究者支援事業」として
採択していただき助成を賜りました。このような機会をいただき
ましたことに感謝申し上げます。本学総務係、会計係、庶務係の
皆様にもお世話になりました。まことにありがとうございました。

「音楽学部若手作曲家・演奏家・研究者支援事業」
申請者 **仲辻 真帆**

ブックレットに使用している写真は、大学史史料室（東京藝術大学音楽学部2号館1階1）所蔵写真
または史料室スタッフ撮影写真です。

『東京藝術大学 大学史史料室のあゆみ:
記録、記憶、想いを受け継ぐ』
電子書籍版

発行日　2021（令和3）年9月30日
編集・発行　東京藝術大学音楽学部大学史史料室
〒110-8714
東京都台東区上野公園12-8
東京藝術大学音楽学部2号館1階
TEL 050-5525-2358

Copyright ⓒ 2021 The Geidai Archives（Historical Document Room）
Tokyo University of the Arts. All rights reserved.
ISBN978-4-600-00858-1

東京藝術大学

Copyright © 2021 The Geidai Archives (Historical Document Room)
Tokyo University of the Arts. All rights reserved.
ISBN978-4-600-00858-1